# 旅人としての郁達夫
## ——文化史的角度からの考察

高 彩雯

## 前書き

郁達夫（いくたっぷ，1896 ～ 1945）をめぐって、大方の関心はその小説創作に集中し、まれに旅行記が話題にされても、一般に批評家や研究者の関心は文体美に集中する。しかし、郁達夫は旅する人であり、旅行記を書き続けた作家であり、一九三三年以降は政府機関の委託を頻繁に受けて、旅行案内も書いている。一九三四年には紀行文『屐痕處處』を出版し、三六年に『達夫遊記』を出版し、没後出版された『郁達夫遊記』という名の単行本も少なくない。小説家郁達夫ではなく、旅行記作家郁達夫として注目を浴びた時期もあった。同時代文学者の阿英は「達夫の小品文は、才能のある知識人の動乱の社会におけるの苦悶の気持ちを十分に表している。たとえ紀行文であっても……彼の怒りと煩悶は行間に溢れていると思う。彼の旅行記は「憂」を書いているわけではないと言っているが、『憂』は実際に存在している。」[*1] と論じ、旅行記の「憂」に着目し、作家を取り巻く政治環境を暗に批判している。後の研究者も同様に「憂」を取り上げて郁達夫の旅行記を論じている傾向がある。[*2] 彼の人生そのものが日本留学、中国各地への取材旅行、そして東南アジアでの客死という旅人としての人生であった。本稿は「憂」だけではなく、旅人郁達夫がどのような視線を異郷に注ぎ、文化の境界線に立つ自分自身をどのように自覚してい

---

*1　「郁達夫小品序」、阿英編『現代十六家小品』、光明書局、1935、345 頁

*2　例えば、姜靜楠の「江湖之憂更蕭灑 -- 論郁達夫及其紀遊文學」（『中国現代文学叢刊』1996 年第四期）を参照。

たのかという点に注目したい。そもそも彼の異郷への視線は、旅人というアイデンティティ形成にいかなる影響を与えていたのであろうか。旅行と放浪に彩られた生活様式を美学へと昇華する郁達夫を取り巻く歴史とは、どのようなものであったのだろうか。本稿は郁達夫が旅行記作家として活躍していた一九三〇年代初期を中心に、旅人郁達夫をめぐり交錯していた多様な文学的・文化的問題の検討を目的とする。

## （一）旅人という自我定義――ユダヤ人とジプシーへの投射

郁達夫は青年時代にはすでに「旅行」に関する多くの文章を書いている。日本での旅行記「塩原十日記」（1921）や、「蘇州煙雨記」（1923）、「南行雑感」（1926）、「一個人在途上」（1926）などの他、ローレンス・スターンの名作『センチメンタル・ジャーニー（邦題）』（sentimental journey）に擬え、「感傷的行旅」（1928）を執筆した。更に遡れば、『創造』同人の「海上通信」（1923）にも感傷的情調に満ちたものは少なくない。郁達夫は、初期小説と同様に、旅行記においても意識的に感傷的な情調に浸り、漂泊の才人としての自己イメージを作り出している。

「感傷の旅行」（「感傷的行旅」）で郁達夫は、自身を「漂流者」、「ユダヤ人」、「ジプシー」に喩え、流浪の不安を次のように語っている。

> ユダヤ人の漂泊は、神の制定した懲罰だそうである。中欧一帯の「ジプシー」の漫遊は、あたかもこのインド民族の一派ロマニの天性のようである。おおかたこの二種類の情緒がわが身に備わっているせいであろう、一カ所に長く滞ってしまうと、荷物と傘を背負い、人影の全く無いところへ行って、憂さをはらすことばかりを考えてしまう。[*3]

漂泊には天罰と放浪という二重の意味が込められており、生まれつきの宿命という自己陶酔とともに「旅行」の美学において巧みに結合されている。果てなき彷徨という情緒の内実は確かに郁達夫が成仿吾の「一個流浪人的新年」を論じて述べたように「離人的孤冷的情懐」[*4]だといえよう。

---

*3 「感傷的行旅」、1928、『郁達夫文集』、第三集、160頁

「離人」とは故郷を離れる人、郁達夫のように母国を離れる人のことである。しかし、留学先の日本から母国に戻った時、郁達夫は、日本で経験した過酷な生活を呪詛すると同時に、母国に安住できない不安も吐露している。

> 僕の今後の暗い未来も、考え始めた。僕の先輩が帰国して母国社会の虐待を受けたため、海に入って自殺した哀史も、思い出した。
> 僕はあの薄情な島国で、十何年も苦しんでおり、もし母国に帰っても、なお社会に虐待されねばならぬとしたら、僕はどうしたらいい！ 日本の少女が私を軽蔑したり、騙したりする時、まだ『僕は異郷にいるのだから』と言えるが、もし母国の少女も日本の女性と同じように私を軽蔑するならば、何と言ったら良いのか。あの euraasia（高註：欧亜混血人のこと）はもうあそこで私を虐めているではないか？ 彼女はもう私の存在を否定しているではないか？ ああ、ああ、ああ、ああ、僕は間違ってる、僕は間違ってる。僕は帰国すべきじゃないんだ。同じように軽蔑されるならば、母国の同胞に軽蔑されるより、他国の人間に軽蔑された方が、また自分を宥められる。（「歸航」）

ここで郁達夫はヨーロッパ大陸やアメリカ大陸で現地の社会に入り込めないユダヤ人とジプシーの姿に、彼自身の揺れ動く心情を托している。勿論、郁達夫は一流の自己戯画の手法で自分の不幸を想像・創造して、行くあてのない漂流を余儀なくされる民族であるユダヤ人とジプシーに投射して、不運の民族へ深い共感を寄せているのである。彼は不幸の民族としての意識を膨張させ、「民族」－「個人」を一体化させ、優秀である自分は劣等の民族に属されるため、蔑視される羽目に会わせずに得なくなる意識で苦しまれる。中国に帰国した郁達夫は、予想通りに不遇にみまわれ、中国の現実に失望した。彼は故郷に戻ることも出来ず、中途半端な人間になってしまったという自意識に酷く苦しんだ。1923 年の『還郷記』という散文風の小説において、中国人の主人公「我」は故里への帰路、旅館の

---

*4 『創造』季刊、第一巻第一期。

宿帳に職業を「浮浪」、本籍を「朝鮮」と記入している。郁達夫は、日本で半殖民地「支那」の人民として蔑視されたトラウマを、中国に帰っても執拗に抱き続け、そのトラウマを主人公に照射したのである。外国滞在中は故郷に対する郷愁を抱いたにもかかわらず、帰国した故郷にも安住できないという悲しみは、作家郁達夫の矛盾の根源であろう。帰着点も到達点も喪失するという虚無感を、彼は「旅」によって象徴的に表現したのである。郁達夫は、永遠の旅路にあるという自画像を描き、定住不能の自己イメージを強調した。

このような慨嘆が帰国初期にはエッセーと小説の主人公の口を借りて、しばしば語られている。例えば一九二三年の「落日」という短編小説で、郁達夫を連想させる主人公Ｙは失業の結果、毎日上海市内で自分流の「旅行」をしているのである。

> 朝から晩まで、一等電車に乗って、忙しそうな顔をして見せていたが、実はすることはなにもない。彼はただ電車のガラス窓にもたれて、電車が走り回るのに任せて走り、そこで流れる水のように後ろへ消え去る両側の街並みを眺め、時に町を見るのに飽きると、彼は同席の西洋人女性や中国人女性の腰、肩、胸、お尻、脹ら脛、つま先に目を向ける。
>
> 後には彼は幾日か人力車に乗り、何度か分けも無く駅に行っては、見送りをするふりをした。時には夜中に人力車を雇って黄浦灘の郵船各社の埠頭に行き、明かりの煌めく、旅人の喧騒の中、これから出港する船に乗ったこともある。また幾日かが過ぎると、彼の過敏な神経は、人力車夫にも自分のことを覚えられてしまうのではないかと恐れ、いっそ人力車に乗ることをやめ、ゆっくりと歩き始めた。心の中で、彼は自分の行動にいくつかの良い名前を付け、前者を「走馬看花」と名付け、後者を「徒歩旅行」と名付けた。徒歩旅行は、旅行の場所を基準にすると、市内旅行と郊外旅行の二種類に分けられる。旅行するときの状態を基準にすると、「無事忙行」（用事もないのに忙しい旅）と「吃食旅行（食事の旅）」の二種類に分けられる。

ひたすら時間を潰すために電車に乗って都市の風景を眺めたり、女性の体を見たりする郁達夫の主人公Ｙは、近代都市上海に取り残された高等遊民的失業者の滑稽な一面を演じている。彼の散歩は日常のスケジュールから脱却という点は「旅行」の一種ではあるが、「道の同行者を騙す」ために、「忙し」さを装っている。夜を歩く旅行からは、貧乏な日陰者の面目が伺える。方向を失い、ひたすら暗闇の中を歩くという知識人の姿は、「春風沈酔的晩上」などでも描かれている。旅行という都市中産階級の消費活動を、主人公は暇な貧乏人の歩行活動に擬え、非日常生活としての旅行に漫遊者としての悲哀と滑稽という新しい意味を与えているのだ。

## （二）観光ツアーの文化人――旅行事業と文化との関係

このような小説と旅行記は読者に「旅人」郁達夫という強烈な印象を与えたのであろう。しかし、一九三〇年代に郁達夫の旅行は、後述のように国民党の鎮圧のため、隠棲の文人ぶりを演じ、官庁側をして公式的観光宣伝を郁達夫に依頼せしめるに至る旅行である。一九三三年、郁達夫は、杭江鉄道局の主任から、杭江鉄道に乗って旅行記を書いてくれと依頼されたのである。

> 数日前、杭江鉄路主任曾蔭千氏が、友達を介して相談してきた。私に、一度浙東を遊歴し、耳で聞き目で見た風物を、浙州を訪れる国内外の旅行客に詳しく伝えて欲しい、また、玉山行きのレールは、すでに完全に繋がり、十二月の末に開通する予定で、それと同時に鉄道局が旅行指掌の類の本を刊行する際に、旅行記も収め、もってベーデカー式旅行ガイドブックの無味乾燥さの救済とすることも出来ようという。[*5]

この旅客誘致のための取材旅行には、陳萬里（1892 － 1969）と郎静山（1892 － 1995）の二名の著名な写真家が同伴した。彼らも鉄道局の依頼を

---

*5 「杭江小歴紀程」1934、『郁達夫文集』、第三集、224 頁.「Baedeker」（ベーデカー）はドイツの出版社。旅行案内書を多数出版していた。

受け、作家とともに旅をしたのであった。写真は視覚を刺激する有効なメディアであるが、郁達夫の旅行記は、読者に対し、どの程度の吸引力を備えていたのだろうか。

そもそも、文学者に旅行案内書の執筆を依頼して旅客増をはかる鉄道当局の企画は、文学・観光両者の大衆化を前提としており、近代市民社会の成熟を示すものと言えよう。鉄道は、大衆の交通手段として便利で比較的安価であり、大衆的な観光に適した性格を有している。*6 この翌年にも郁達夫は、東南五省交通周覧会の誘いで、旅費は建設庁負担、付き添いは公路局職員という、黄山への旅に参加している。*7 この時期の郁達夫の旅は殆ど運輸当局の招待によるものであり、郁達夫自身『屐痕處處』の自序で「近年来、四海は安定し、交通は便利になり、私……ですら紀行文の専門家になった。」と述べている。*8 以上からは一九三〇年代初期の中国において、社会的安定と交通手段の発達 *9 と観光業の発展とが三位一体になった情況が伺えよう。

中国では、一九二〇年代から三〇代初期にかけて内戦が続いたものの、観光業が着実に発展していった。一九二三年には上海の中国銀行が旅行部を増設して為替と旅行小切手の取り扱いを開始し、二七年には『旅行雑誌』が発刊され、*10 同誌は二年後の一九二九年一月に季刊から月刊に格上げさ

---

*6　D・J・ブーアスティン著『幻影の時代』（星野郁美、後藤勝彦訳、東京創元社、1981）第三章「旅行者から観光客へ―失われた旅行術」は、「旅行」の近代的な変容を辛辣的に描き、鉄道と大衆旅行の関係を分析している。

*7　「西遊日録」、「遊白岳齊雲之記」、「屯溪夜泊記」、『郁達夫文集』，第三巻

*8　「自序『屐痕處處』」、『郁達夫遊記集』、浙江，浙江人民出版社，1982

*9　白壽彝，『中国交通史』第二章は「民國十七年國民政府統一全國後，積極從事建設…認鐵道為交通之主要工具……於是在行政院之下，創立鐵道部，專司鐵道建設事業…二十年以後，雖有「九一八」與「一二八」事變，然政府深感鐵道之建設與國民經濟及國防關係之重要，就力謀新路線之展築。」と述べている。（臺北：臺灣商務，1965、23 頁）.

*10　『旅行雑誌』（中国旅行社発行）一九二七年創刊号、陳光甫の「発刊詞」と朱成章の「旅行部縁起」を参照。鉄道網の拡大と旅行産業の発展に伴い、旅行部はチケッ

れるほどに好評を博した。[*11] 旅行という商品は、当時の中国で一定の市場を有していたのである。羅蘇文と宋鈷友によると、「上海では旅行が産業になり、遠足は一部市民の楽しみになった。二三十年代、旅行は人々の愛国心を掻き立て、感情を陶冶し、社会と各地の風俗を認識させ、知識をも豊富にさせるものとして認められた。そこで社会団体とマスメディアは旅行を提唱した［後略］」。[*12] 旅行はマスメディアにより宣伝され、公園での行楽に続いて、都市中産階級の娯楽になると同時に、大きな文化的意義を持ち始めていたのである。郁達夫もこのブームに乗り、旅行宣伝者―「旅の魂の呼び売り人」（「行旅的靈魂叫賣者」、郁達夫のエッセイ「二十二年的旅行」より）となったのである。郁達夫を含む多くの文化人は、旅行の準備、景色の見方、旅行後の紀行文の書き方など、旅の楽しみ方を宣伝し、旅行ブームの創出に積極的に参与したといえよう。

## 「中国」を見る写真の視線

すでに述べたように、郁達夫の官費旅行とは写真家同伴であった。それまでにも写真は、より直接的に読者に訴えかけるという性質のために、戦時記事に利用されてきた。やがて一九二〇年代には、戦時の凄まじい光景と同様に、名所の写真も雑誌の紙面を飾るようになっていく。上海市民の愛好した『良友』などの「画報」の編集方針は、まさに「写真を主」としており、「各地からの投稿を歓迎」していた [*13]。一九三二年九月に結成さ

---

ト販売をはじめ、宿泊の予約サービスや旅行切手の販売を担当し、旅客の手間を軽減することに尽力したという。同誌は、毎号紙面の多くを費やして列車の時刻表を掲載している。

*11 『旅行雑誌』一九二八年冬号、「中国旅行社要訊」：「旅行雑誌の発行はこれでもう二年になった。毎季一号の出版では、間隔が長すぎ、読者は皆苦情を述べている。最近各地から手紙が寄せられ、月刊にして欲しいという声が多い。……来年一月から、毎月一冊発行する。」

*12 羅蘇文，宋鈷友，『上海通史・民国社会』の第四章、「都市生活調節的遊園」，上海、上海人民出版社、1999.

*13 『良友』「徵稿啓事」、『良友』61 期、1931、9.

れた良友撮影団は、中国各地を撮影し、その写真は同誌を通して全国の市民に提供されていった。「準備の段階で中央研究院院長蔡元培、交通兼内政部長黄紹雄……鉄道部次長曾仲鳴」らが『良友』撮影団を支持した。連続八期に及ぶ「全国猟影録」では、編集長梁得所自ら各地から上海に写真を送り、中国全土の様々な風景を、上海市民を始めとする『良友』読者に提示した。

それにしても、なぜ撮影団はこの時期に発足したのであろうか。一九三二年といえば、上海事変（一・二八事件）により、大手出版社商務印書館が爆撃され、上海で発行されていた『良友』自体も五ヶ月間の休刊に追い込まれた年である。それにもかかわらず、僅か数ヶ月の間に、撮影団を中国各地へ派遣して「影」（イメージ）を「撮」ったのはなぜであろうか。その原因の一つとして考えられるのが、満州事変と上海事変を経て、日本の侵略に抵抗するため、中国を一つの国として統合しようという、視線の欲望である。沈松僑は、一九三〇年代の西北の旅行記を分析するにあたって、「中国内地都会で生じた西北旅行と旅行記のブームは……イデオロギーの角度から、もっと分析されなければならない」[*14]、と指摘し、その理由として、「一九三一年の満州事変（九・一八事件）で東北を失った中国の民族的危機に直面し」、西北の重要性を認識しており、上海事変後には、洛陽へ遷都されるなど、西北開発の必要性が国民の間で広範に認識されるようになったためだと考察している。[*15]

良友撮影団は、西北だけではなく山東孔子廟に赴き、広東、西南地域をも訪問した。彼らの撮影した中華民国の写真一枚一枚は、国内のあらゆる場所の視線による所有を可能にし、読者に共同の国家を想像させ幻想させ得る。『良友』の経理伍聯德は「撮影隊を全国に派遣して現地で写真を撮らせる……我が国をアピールするすべてのものを収める」[*16] と、交通部

---

*14　沈松僑,「江山如此多嬌 -1930 年代的西北旅行書寫與國族想像」,『台大歴史學報』第 37 期，2006 年 6 月，161 頁

*15　同前註、162 頁

*16　馬国亮、「舉國囑目的盛事」、『良友憶舊 - 一家畫報與一個時代』,（臺北：正中,

長の黄紹雄は「山河の相違を知った後で、異なる軌道を同一に定めることが出来る」[*17] と各々書き残しているが、彼らは、地方性の差異が存在する一方で、一つの民族としての方向も存在すると、考えていたに違いない。また、内政部次長は「美しい山河のイメージを全国人民の脳裏に映じ入れ、その愛国心を大に増加させ強化させる」[*18] という言葉を寄せた。このように当時の官僚達は、イメージによって国民的アイデンティティを強化できると考えていたのである。同時に、一九三二年以後の、一つの「中国」という共同体建設のための「視線」の熱意が感じられるだろう。

**詩と現実－中国を想像する枠組み**

郁達夫は、いっぽう、書物を通しての予備知識より旅行の楽しみを先取りし、旅行中にも常に旅行記に目を通す習慣を持っていた。旅行の欲望を掻き立てる旅行記は、ヨーロッパでは十九世紀から流行し始め、初めて専門的な旅行案内を出版したのは、ドイツのベーデカーである。郁達夫は、鉄道会社の依頼を受けた際、自分の任務は「ベーデカー式旅行ガイドブック（旅行指南）の無味乾燥さの救済」だと書いている。ヨーロッパの旅行業は百年以上の歴史を有しており、旅行案内書の文体は、観光客のニーズを出来るだけ満足させるノウハウを備えていたであろう。それとも、文人としての郁達夫は自らの旅行記の優越性を公言しているのであろうか。興味深いのは、郁達夫が自分の旅行記を「旅行指掌」と呼び、ベーデカーのガイドブックを「旅行指南」を呼んでいることである。方向を示す指南車に由来する言葉「指南」に比べ、「指掌」は「掌故（故実、典故）」の意味あいを含んでいる。このことから、郁達夫の旅行記は、単純な方向付けだけでなく、歴史文化の故事も教えるという旅の想像を掻き立てる機能を目指していたといえよう。彼自身も昔の中国読書人のように常に旅行記と中国古来の地理書（方志）を持って旅路に就く習慣を有していた。[*19] 旅行者

---

2002）76 頁

*17 『良友』69 期、29 頁

*18 『良友』69 期、29 頁

の眼差しが、前人の指した方向に向かうのは自然なことであろう。この意味で、「人々はすでに知っているものを身に旅行する」（D・J・ブーアスティン、1981）という言葉は、有効である。言い換えれば、旅行とは、旅行者が自らの内なる文化と対話することなのである。

ここで、郁達夫と旅行との関係に具体的に触れて、問題点を整理したい。

一九三四年に郁達夫は、建設庁の招待で文学者林語堂（1895 ～ 1976）、社会学者潘光旦（1899 ～ 1967）らと臨安を訪問した。同行者の殆どは、外国留学経験を持つ知識人であり、郁達夫も青春期の殆どを日本で過ごしている。林語堂は、宗教心の強い父を持ち、教会学校を経て、上海のセント・ジョーンズ大学を卒業後清華大学で教員になり、渡米してハーバード大学に留学した。潘光旦は、清華大学卒業後、アメリカのコロンビア大学で修士を取得した。三人とも、科挙受験のための伝統教育を受けたことはなく、西洋的な知的背景を持っている。この三人の中では、伝統的な教養では郁達夫が最も高いと思われる。なぜなら彼は日本へ行く前に、読書人の家庭で古典教育を受けたことがあり、文言の詩文を綴ることも出来たからである。

寺院参詣の男女たちをめぐって、彼らは次のような議論を交わした。

「中国の庶民は本当に可愛いね」これは語堂の感嘆。

「春秋両季節は香りの市場だ。彼女たちの唯一つの娯楽で、それに乗じて山で遊んだり水で遊んだり出来るし、それに乗じて性欲を発散することも出来る。Pilgrimage の効用は、本当に大きいね！」これは精神分析学者潘光旦の解釈である。

この一節だけを見れば、それが「中国人」の論評だとは思いつかないだろう。林語堂の場合は、客観的な距離を置いて、まるで中国の庶民を鑑賞するような眼差しを持っている。潘はエリス（Henry Havelock Ellis

---

*19 例えば一九三四年の「南遊日記」に天台へ遊覧するため、「図書館で『天台山全志』を借りて、案内のために持って行くつもり」だと書いており、「西遊日録」は、黄山旅行のため、『黄山紀遊』を読むと書いている。他の旅行記の中でも、このような記録は枚挙に暇がない。

1859-1939）の『性心理の研究』（*Studies in the Psychology of Sex*（7 vol., 1897-1928; completed ed. 4 vol., 1936、中訳『性心理学』）を訳した学者であるが、彼は同書の翻訳にあたって、中国古来の例を援用して、エリスの学説を証明した。山遊びと性欲の繋がりは、さすが性心理学者の発想だと言える。郁達夫、林語堂、潘光旦ら三人の「遊山老爺」は、冗談めかしてドイツの文豪ゲーテの自伝作品「『わが生涯より・詩と真実』（1811）（*Aus meinem Leben: Dichtung und Wahrheit*）の「詩と真実」という対照的な言葉を駆使し、彼らの目の前の風景を認識して分類した。

「このような生活に慣れたら、また都市に行って埃を吸ったり、映画を見たりしたくなるのだろうか。」

語堂が感慨無量に独りごちているのは、もちろん彼の Dichtung がまたも災いしているのだ。これより前に、語堂と増嘏、光旦らは、かつて富春江一帯を旅行し、道中、意にそぐわないことがあると、語堂は言った。「これは Wahrheit!」つまり「現実と理想の一致不能」を言っているのであり、ゲーテの書名を借りて、新しい解釈を付与したものである。従って、僕らの今度の西遊では、どんな愛すべき憎むべきことに出会おうと、全て Wahrheit と Dichtung という二つの言葉で片付けられてしまう。

「Dichtung（詩）」というのは、想像の景色であり、「Wahrheit（真実）」はその期待を裏切る現実であり、三人の旅にあっては「これは絶妙な Dichtung（詩）だ」や、「Dichtung（詩）は Wahrheit（真実）を破壊した」のように、Dichtung と Wahrheit が、宛も外界と接触する際の認識の枠組みのように機能している。外界が Dichtung（詩）に収まるかどうかが、その価値を決定する判断基準となっているのだ。一行三人が繰り返す「Dichtung と Wahreit」は、表面的には言葉遊びに見えるが、実際には、現実と想像との懸隔に対する気持ちの婉曲な表現であったのではあるまいか。

その後、郁達夫は一人で揚州を旅した時、林語堂に手紙を送って、彼の揚州印象を書き、林語堂の揚州観光をやめさせようとした。その理由を、「揚州の二文字を夢見ていると、響きにおいても、歴史的意義においても、

如何に艶麗で、如何に人の心をうっとりさせることだろうか」[*20] と記している。鉄道の開通が水上交通から集客力を奪ったため、水都揚州の旅客は減少し [*21]、揚州は寂れていく一方で、文学上の名声だけを残していたのではあった。

それでは、現実と対立する「詩想」はどこから生じるのであろうか。前にも触れたが、郁達夫の場合、その淵源は中国文学、とくに明清の文学でったと思われる。

小説から旅行記へ：「引用」の方法

ここで検証すべきもう一つの問題は、小説家から旅行記作家への転身がいかなる内在的理由と執筆手法を伴っていたかという点であろう。同時期の彼の小説を検証すると、旧作との対話が繰り返し行われる点が興味深い。「遅桂花」という小説は書き手である小説家に宛てた一通の書簡から始まっており、発信者翁則生をして書き手に「あなたの小説『南遷』（南へ行く）の主人公とは、僕のことかしら」と聞かせることにより、「今・ここ」にいる（「遅桂花」の）「書き手」は昔の私小説（南遷）の「私」とは別人になり、旧作との繋がりを持たせながら、昔の「私」との距離を持ち出させることになるのだ。作家＝「私」の退場は作家自身の執筆の方法の変化によるのだ。また、本作中ではいくつかの過去との「和解」が行われている。例えば、欲望の高揚と浄化、病と回復。金木犀の香りで性欲を掻き立てられて悩まされる作家も、恋で死にかけた「南遷」の主人公翁則生も、不幸な運命に見舞われた翁の蓮妹も自然豊かな山村により癒される。拙稿「郁達夫「十三夜」論」、において論じたように、この時期の郁達夫は「自己のトラウマと対面するようになっ」[*22] ており、意識的に

---

*20 「揚州舊夢寄語堂」，1935，5，20，『人間世』，28 期。

*21 鉄道の開通に従い、水路の利便が喪う例が多い。例えば、アメリカで大陸横断建設の開通により、ミシシッピー川の水運が衰えたという。園田英弘『世界一周の誕生：グローバリズムの起源』、（2003、文芸春秋）を参照。

*22 拙稿「郁達夫『十三夜』論－台湾人画家と西湖伝説の物語」を参照、『東方学』

癒しの作業を行っているのだ。故に、自意識を前面に持ち出すのではなくて、大自然の中で自然の健康美によって欲情され、再びまた自然によってもう一度感情が浄化されると述べているが、これは大自然を触媒として機能していることを語っているのだ。面白いのは、引用された作品「南遷」自体が、多数の引用から構築されている作品であるという点であろう。一九二〇年代における郁達夫の「沉淪」「南遷」などの若い世代の愛読者が郁達夫とともに中年に入っており、郁達夫は旧作の引用によって、読者への召喚の機能を果たしているのではないか。

李欧梵は「引用される浪漫主義：郁達夫『沈淪』の三編の小説を読み返す」において、「南遷」の各節の表題のドイツ語を考証して、全てはゲーテの作品から由来するとし、そこからまた「南遷」の「テキストの引用」にも注目して、郁達夫の早期小説とドイツ浪漫主義との関係を再考している。また「銀灰色の死」もダウスンの生涯と作品から霊感を受けたということは、これまですでに言われているので、ここでは略す。重要なのは「抒情的な境界と効果を追求するため」[*23]、郁達夫は引用を繰り返して、テキストの背景としてのコンテクストも援引して自分の文学世界の背景としていた点がある。

やや後の作品「瓢兒和尚」も旧友との再会というプロットを使用している。隠居した旧友は、軍閥抗争がもたらした混乱と青年期の恋による狂態は既に落ち着き、静かに葛粉の味を味わう山人になっている。

「遅桂花」も「瓢兒和尚」も、引用という手法により成立した作品である。旧作の引用は勿論、「『達夫自選集』序」においても、郁達夫は「「遅桂花」、「過去」、「在寒風裏」の三作は……恐らく常にドイツの小説を愛読するため、無意識の中で、ドイツ人の Erzahlungen（物語、高註）の麻酔を受けた後の作品であろう」と述べた。書き手の作家は愛らしい自然児の蓮妹を見て、思わず「延生（Jensen）という作家が書いた小説《野紫薇愛立喀》

---

119 輯、2010、1

*23 李欧梵「引來的浪漫主義：重讀郁達夫『沉淪』中的三篇小說」、『中外郁達夫研究文選』，浙江大学出版社，2006，735 頁

（Die Braune Erika）」と「哈特生（Hudson）が（Jensen を）真似た『緑の館（Green Mansions）」を思い浮かべて、不運な女性たちの共同運命を想起し、感傷的な情調を浸るのだが、これこそ引用によって情調を喚起したい郁達夫の文学的な手法だと言えようか。「瓢兒和尚」も、結びで「二人の再会は『西湖佳話』のようである」と、旧友である和尚は笑いながら話す。「引用とは、反復される文面であり、なおかつ、反復する言表行為である。」[*24] このようにして、テキストの重層の引用により、多くの読者に共通する文学的記憶を呼び起こす手法は、彼の小説でも、旅行記でも常用される。こうして抒情が、古今の文学テキストで再生されるのだと言えよう。書物の旅行と旅行の書物の連鎖は、郁達夫文学の特徴であり、彼の旅行記は常に他のジャンルの文学からの引用によって、異なる「場」（トポス）を作り出すのだ。

郁達夫のエッセー「浙東景物紀略」の結びには「今度の旅行のおしまいは、意外にもドイツロマン派詩人の小説に少し似ていた」と記されている。この一句にはロマン派の山水描写と田園描写に心酔のあまり、それを観察の基準とする郁達夫の心理がよく現れている。これと同時に、中国の典型的な山水観を現す山水画も郁達夫の胸中に存在しているといえよう。安徽の昱嶺山に登った時には、商人の行列を見て、それは「見るほどに画中の通行人のようで、小さい頃に見た鍾馗送妹図或いは長江行旅図を思い出させる」と述懐し、浙江の方岩を見た時には、中国の「南宗北派」の技法を想起しているのである。[*25] このように、郁達夫の旅行における視覚と意識の活動は、現場に向かうよりも、「文脈」[*26] に回帰していた点は興味深

---

*24　アントワーヌ・コンパニュン著、今井勉訳『第二の手、または引用の作業』、水声社、2010、92 頁

*25　「浙東景物紀略」『郁達夫文集・第三集』245 頁

*26　斉藤希史の「明治の游記」で、「漢文脈特有の、景と史と志をあわせて紀行の骨格とする手法の再発見こそ、海外游記によってもたらされたものであった」と明治の游記を分析している。斉藤希史『漢文脈の近代』、名古屋、名古屋大学出版会、2005. 漢文脈より、郁達夫は広い文学的なコンテクストを常に意識しているだといえよう。

い。「漢文脈」への回帰は、旅を「名所」に集中させることであろう。天目の昭明禪院で、全増嘏（哲学者、1903-1984）が徐文長の律詩を写した時、郁達夫は東天目八景の名前を抄録した。ちなみに、魯迅は一九二五年に「再び雷峰塔の倒壊について」（「再論雷峰塔的倒掉」）を書き、「われわれ中国人の多くのものは、――かならずしも四億の同胞全部を含むものでない、その旨、特に謹んで声明しておく！ ――たいてい、「十景病」か、少なくとも「八景病」に、かかっている。」[*27] と批判している。八景、十景などは、古い認識方法の産物であり、リアルな自然ではなく、真の自然に直視するためには古い枠組みを破壊する必要があるというのが、魯迅の中国人の形式主義への批判あろう。一九三四年の旅行における八景の抄録から、郁達夫が文人的認識法を踏襲していたこと、古典への憧れを抱いていたことが窺われよう。正に彼は「骸骨迷戀者」と自称するように古典愛好の一面を見せるのである。

**墳墓への執着：失われた時間を夢として想像する**

郁達夫一行は「琴操」の墓参りした時に、『臨安県志』に琴操の故事が記されていないことに不満を漏らしている。林語堂は「光旦、君は馮小青の墓を手入れしなさい、私は李香君の墓を手入れすることを決意した。この琴操の墓は、君たちに任せよう」と話す。この旅行者一行は、明らかに一般の観光客ではなく、特別の審美趣味を持つ「文士」であると言えよう。彼らの視線の焦点は、往時の文人と親交を結び、文人を理解し愛した才女に絞られる。

墳墓と才女に拘る旅行記と言えば、谷崎潤一郎の「蘇州紀行」が想起される。一九一九年、谷崎は『新小説』に「蘇州紀行」を発表し、墳墓に対する強烈な興味を次のように示している。

> そればかりか、虎丘へ行つた時にも有名な古真嬢の墓のありかをさへ注意してはくれなかつた。其の墓は小さなみすぼらしいもので、初めての人にはちょいと気がつきさうもない道端に立つて居るのである。[*28]

---

*27 『墳』所収。

谷崎が案内者の無知を罵る原因は、「案内者を頼みにして居るといつも名所や風景を見落としてしまふ」[*29] ためである。「蘇州紀行」で谷崎は、真嬢（原文ママ）や西施を思いながら、彼女たちを「お伽噺のお姫様」として想像し、漢文漢詩の古典的世界の異国情調がもたらす恍惚に浸っている。『剪燈新話』の「聯芳楼記」を繰り返し引用し、作中の五首詩で「蘇州紀行」を結ぶ。末尾の「夕日がもう霊巌山の塔のほとりに沈みかけていた」という一文は象徴的である。漢文漢詩の美に対する耽溺するようすが読み取れよう。中国に行った谷崎は「お姫様の故郷」を見つめる一方、同胞の日本人観光客を想像の興趣をそぐ邪魔者と見做し、金銭にうるさい中国人案内者を俗物と差別して、谷崎自身の作り上げたお伽噺の世界から放逐してしまった。しかし、野崎歓が指摘するように「いずれにせよ驚くべきはその旅における―芥川にとっては不可解なまでの―リアリズムの欠如ではなく、正に自らの五感を解き放ってリアルな中国の風光に向かいながら、しかもそこに「仙境」を確かに見て取ってしまう、その「肯定の欲望」（河野多恵子）の力強さなのである」と言えよう [*30]。

谷崎の過剰なまでの肯定欲望とは異なり、郁達夫は目の前の世界を「仙境」として「肯定」できない。過去の「詩」に陶酔するあまり、眼前の「現実」を否定してしまうのである。ただし、郁達夫一行の旅行と谷崎潤一郎の旅行は、過去の華麗な世界を追憶し、再現するという点で共通している。このような「他界」、つまり、文字世界にある別の審美世界は、認識のモードとして、長期間に渡って中国と日本の読書人の間で有効であり続けたと考えられる。青木正児は『江南春』で、中国が「文字の国」[*31] であると感心し、江南を歴訪して「江南の旅行案内に代えて携帯した『儒林外史』の数行を拝借して大観を尽くそう」[*32] と記している。

---

*28　谷崎潤一郎、「蘇州紀行」『谷崎潤一郎全集』第六巻、224 頁

*29　同前注、223 頁

*30　野崎歓、『谷崎潤一郎と異国の言語』、京都、人文書院、2003、65 頁

*31　青木正児、『江南春』、15 頁

*32　青木正児、前註『江南春』4 頁

話を郁達夫一行の旅行に戻すと、才女の墳墓に対する愛惜の念は、「文字」＝文化に対する愛惜に根源を有する。やや早い時期の作品「十三夜」(1929) は、西湖畔で月の夜に出会った美人（正体は明代の幽霊）に魅了される台湾人画家が主人公であり、夜に彼女の姿を探し彷徨し発狂して死んだ男の物語である。[*33]「十三夜」という作品の創作は、郁達夫が王映霞の祖父、王二南に頼まれ、ある明末の才女の墓碑を写したことに端を発する。郁達夫は、その墓碑を写した時、感動のあまり涙が止まらなかった、と数年後の文章に記している。教養に溢れる美しい女性が、郁達夫を感動させたのであるが、それももちろん、彼の少年時代からの愛読書『西青散記』が関連していたのである。

**自然の見方、書き方**

郁達夫は「西青散記」を少年期から愛読し、青年時代留学中に上野図書館で読んだ後には、抄写しようと考えたこともあった。[*34] 自然を満喫するに際して、自分は史梧岡のような文才を持ち合わせておらず美景を充分に伝えられないと嘆いたこともあった。[*35] 以下で示すように、この時の郁達夫は、自然景色の鑑賞とその文学化は小品文と深い関係を持つと示唆していたのであった。

郁達夫、林語堂、潘光旦らの明清文学の提起は、同時期の明清文学（とくに明末）に関する議論を想起させる。一九三三年から一九三四年にかけ、小品文論争が生じた。当時『語絲』では既に多くの小品文が発表されていたが、林語堂は小品文を大量に掲載する二つの雑誌を創刊した。一九三二年の『論語』と、一九三四年の『人間世』である。林語堂は明の小品文を大変高く評価していたが、これは林語堂独自の発想ではなく、周作人の文学論に由来していた。周作人は、一九三二年の『中国新文学の源流』で、

---

*33 参照拙稿「郁達夫『十三夜』論－台湾人画家と西湖伝説の物語」、『東方学』119 輯、2010、1

*34 郁達夫「重訂西青散記題跋」、『郁達夫文集』、第七巻

*35 郁達夫、「西遊日録」、『郁達夫文集』、第三巻、279 頁

現代散文の源流を明末の公安派と竟陵派に求め、明末の散文を賞讃している。一九三四年の『人間世』創刊号には「十四年来中国の現代文学における唯一の成功は、小品文の成功である」（十四年來中國現代文學唯一之成功，小品文之成功也。）*36 という宣言が掲げられている。郁達夫も同誌創刊号に「臨平登山記」、第三号に「出昱嶺關記」、第五号に「自序『屐痕處處』」などを発表した。『人間世』は当時の人々と明清文人の旅行記、小品文を多数併載して、「新鮮で喜ばしい」（清新可喜）文章を提唱していた。

三二年以降には、小品文の書き方と小品文を書く作家の生き方が議論の的になり、攻撃の鉾先にもなっていた。魯迅は「申報・自由談」で「風刺からユーモアへ」（「從諷刺到幽默」1933、3、7）、「「滑稽」例解」（「滑稽」例解）（1933、8、14）などを発表し、「ユーモアは中国産ではなく、中国人はユーモアに長けた国民ではない」と批判し、小品文のユーモアへの傾斜を批判している。これに対し、三四年の周作人の自寿詩事件では、林語堂は「周作人詩の読み方」を発表し、「沈痛を悠閑に寄せた」という周作人の主体のありさまを暗示している。

このような文学思潮の流れの中に、郁達夫は身を置いていたと言えるだろう。彼は、書き方と主体との関係に苦悩していた。創造社との絶縁から左連の成立までの一連の事件の間、どう書くかということに、彼は苦しんでいたのである。郁達夫は、左連に短期間参加したが、結局脱退を余儀なくされた。*37「彼女は一人の弱い女性」（「她是一個弱女子」1932）という社会主義的色彩の濃厚な作品を無理やりに執筆したが、評判は悪く、彼自身にとっても満足のいく出来ではなかった。「没落の悲哀」*38 に浸りつつあった郁達夫は、努力して苦手な同伴者小説を試みたのであるが、「自分は革命家ではないので、こういうことしか書けないのだ」とも呟いている。左翼文壇隆盛の嵐の中で、郁達夫は、作家の主体性や自らの偏愛的性格を

---

*36 「人間世，發刊詞」1934、4、5，2頁

*37 鈴木正夫『悲劇の時代作家』（研文出版、1994）．117頁

*38 一九三五年九月十六日、「夜に時流の雑誌などを読んで、頗る没落の悲哀を感じた。……」と日記に書いている。郁達夫、「秋霖日記」

踏まえつつ執筆可能な作品について、自分なりに考えていたに違いない。

**沈黙の意味：遠くへ**

三十年代の郁達夫に関して、今村與志雄は、一九三六年出版の『閑書』に注目し、『閑書』の「自序」の意味について、「沈黙」の角度から、「自発的沈黙」は、置かれた状況によっては、「非自発的沈黙」の場合のあることを、さすがに郁達夫は心得ていた」。という興味深い考察を行っている。*39『閑書』の目次を見ると、愛読する作家の紹介（ツルゲーネフ、ロレンスなど）の外に、杭州の八月、玉皇山、浙江の今昔、古都の秋、江南の冬景色、山水と自然景色の鑑賞など自然への憧憬に関する文章が多数収録されており、書籍の約半分を占めている。残りは、「ユーモア」と小品文に関する文章である。一見すると隠居趣味の閑人の随筆だが、「自序」は明らかに不満に満ちている。

> 実際的なことをするのは、紙と筆を弄び、空しい話をするよりずっと面白い。「余あに好んで弁ぜんや。余は已むを得ざるなり。」言葉にしてみると些か孔孟の徒のようである。が天に無理やり閑人にさせられた後では、彼の寂寞と寂しさとは、一言二言の言葉によって語れるものではないのである。*40

時流に閑却され、言いたいことを言えない沈黙状況におかれた郁達夫は、山水と山水を描く文章に逃避したのだろう。三十年代初期の一時期に紀行文が流行していたことは、創造社の元メンバーである穆木天の文章からも読み取れる。穆木天は『大晩報』に「紀行文の類を談ず」（談遊記之類）を寄せ、つまらない紀行文を書くよりは、ギリシア、ローマから現代に至る外国文学を紹介すべきであるという意見を発表している。*41 郁達夫

---

*39 今村与志雄「郁達夫の『閑書』―読書ノートその三」、『魯迅と一九三〇年代』（研文出版、1982）

*40 「閑書・自序」、一九三六年四月。『閑書』（上海：良友文学叢書、1936）

*41 穆木天「紀行文の類を談ず」（談遊記之類）、『大晩報・火炬』1934、6、21

は一九三五年の「山水及び自然景物の鑑賞」（山水及自然景物的欣賞）で、読者に山水の鑑賞法につい親切に語る。一方で、その前には「静かな文芸作品」（静的文芸作品）（一九三四）では、湖畔で自給自足の生活を送ったソロー（Henry David Thoreau、1817 − 1862）を賞讃している。ソローが若い時からの愛読書であったというだけでなく、当時短期の安定生活を送っていた郁達夫にとって、ソローの田園での隠居生活が自らの生活と符合するように感じられたのではないだろうか。「清新な小品文字」で郁達夫は、「およそ田園風景と悠々自適な自然生活、及び純粋な情感を描写するには、このような文体（小品文、筆者注）をもって最も美しく最も合致しているとみなすべきである」*42 と絶賛している。小品文の文体こそ自然景色の描写に最も適した文体であるという結論は、郁達夫の『西青散記』に対する愛着からも伺える。自然を見る目、自然を描く文体と明清文学の読書との関係が、郁達夫の三十年代初期の文章では、随所に見られるのである。一九三三、一九三四年の旅行においても、明清文学への眼差しが強く感じられる。三十年代の旅行ブームの真最中に、小品文という文体を借りて、各地の故実と山水の美景を描いた郁達夫は、小品と旅行との間に架橋を渡したともいえよう。袁中郎、史梧岡、ドイツロマン派などの「静かな」文芸作品を自在に駆使して、郁達夫は、旅行ブームの中で山水鑑賞とその書き方を読者に示したのである。

魯迅に代表される「匕首」と「投鎗」の戦闘的雑文が存在したにもかかわらず、郁達夫が「性靈」と「閒適」を掲げる小品文に接近した原因は、国民党の言論弾圧により強いられた沈黙と郁自身の「遠くへ行きたい」*43 という漂泊・漫遊の天性に求められるであろう。「二十二年的旅行」では浙東旅行に出た理由について、官庁により委託を受けたという理由の外

---

*42 『閑書』所収

*43 「懺餘獨白」で郁達夫は「自然の愛好から必然的に遠くへの憧れが生じる（これはドイツ人のいわゆる Sehnen-sucht nach der Ferne）この遠くへの憧れから、また必然的に遠方への旅に行く感情が醸されるのだ（これはドイツ人のいわゆる Wanderlust）。」だと述べている。

に「憂鬱を晴らすため」、「禍は口より出ず」ことを恐れ謹慎の生活をしていた、とも述懐している。既に今村与志雄が提示したように「国民党反動派」の鎮圧を避け、杭州に避難し[*44]、先に触れた阿英の指摘している「憂」で沈黙させられていた郁達夫は、官庁の依頼を利用して各地を周旋し、自分の審美的センスに合う職業的な旅人としての生き方を選択したのではないだろうか。

しかし忘れてならないことは、一九三五年に良友図書の趙家璧が『中国新文学大系』を編輯した際に、郁達夫が『散文二集』を担当し、その解説で五四新文学運動の歴史的意義を再確認をしている点である。郁達夫はその中でもう一度「五四運動の最大の成功は、第一は『個人』の発見だ」と断言し、旧道徳に束縛されず「覚醒された思想を中心として（中略）現代の散文は発展してきた」と述べている。[*45] 確かに中国の新文学では魯迅の「匕首」のような雑文もあり、豐子愷のような「清幽玄妙」な文章もあり、様々な個性が共存しているのだ。左右両派の文学者が政治的スローガンを叫ぶ不寛容な時代において、散文の中に再び「個性」を追求することは、憂鬱を晴らそうとして遊ぶ郁達夫にとっては真剣なアイデンティティ探しの試みであったと思われる。林語堂の散文を以下のように評価する時、郁達夫は自分の気持ちを語っていたのではないか。「近来風雅に浸り、性霊を提唱するのも、また時勢のためであり、消極的な反抗と有意的な独りよがりだと見なしてもいい。周作人は好んでよく（自分が）外国人の言ったように隠士と反逆者の融合という言葉を引用して自嘲するが、この言葉はに周作人に用いたが、林語堂にも使える。」[*46] と郁達夫まとめているが、ここで郁達夫は自分も周作人と林語堂のようなこの「個性」—隠士と流氓の両面性を強調して、隠士も流氓も権力の中心から距離を置き、消極的な反抗で自分の独立性を示していたのではあるまいか。正に郁達夫の「偉大なる沈黙」という文章で語られているように、沈黙とは「沈黙の反抗」で

---

*44　注 39，213 頁

*45　郁達夫「新文学大系選集導言」、『郁達夫全集・文論（下）』、180 頁

*46　郁達夫「新文学大系選集導言」、『郁達夫全集・文論（下）』、194-195 頁

あり、当時の「文化統制」のため、偉大なる文芸作品はまだ世に現れないが、郁達夫はいつか必ず誕生すると期待をもち続けていた。*47

事実、その後の郁達夫は、抗日のため東南アジアまで漂流して、一時期シンガポールの『星洲日報』文芸欄「文芸」やペナンの『星槎』文芸欄「文芸」の編輯者になり、新文学の成果を広めるようと尽力し、果てしのない旅路を歩みつつ新文学者としての誠実さを貫いたのである。

## 結び

早期の郁達夫におけるユダヤ人とジプシーへの共感は、留学時代から続く不安定な劣等の民族という自意識がもたらしたものであり、帰国しても定職のない新帰国者の彷徨に由来する。郁達夫の参加した雑誌『創造』には、創造社同人間の同情しあう思い、そして同情の原因である漂泊に対する不安な情緒が漂っている。その一方で、三十年代初期には、大都市上海を中心に発展していく資本主義と日本の侵略に対するナショナリズムの勃興とによって、中国の旅行業はかえって著しく発展した。郁達夫の紀行文は中国各地の写真とともに、『良友』、『申報・自由談』の紙面を飾り、都市市民の中国像想像に一役買ったことであろう。また、旅行が田園や故郷から切り離された都市市民のための暫時の慰安になると、旅行消費の需要を提供するために、出版業と政府は文士を動員し、旅行することを奨励し始めた。郁達夫は、そのような旅行ブームと小品文ブームという時流に乗って、旅行文学を談義し、近代的旅の楽しみ方を都市読者に示したのであった。彼の旅行は、官庁と出版社絡みの観光視察に変形し、出版文化と観光業との密接さを実証したのである。

しかし郁達夫はその際に、古典的文学世界を詩的に描きながら、引用の手法で「いま、ここ」以外の場を幻視して、理想と現実の分裂を表現し、どこにも安住できない不安を露わにしてもいる。王映霞と同居して新たに家庭を築いた郁達夫は、三十年代の初期、鎮圧から逃避のために杭州の中国古典文化の中に蟄居しており、小品文というジャンルで紀行文の文体と

---

*47　郁達夫「偉大的沈黙」『良友図画雑誌』106 期、1935、6、15

個性の発揚などを模索している。日中全面戦争の事態を迎えると、王映霞との不和により、やがて杭州での幸せな家族が崩壊し、郁達夫は家庭と国家の不幸のため更に南方流浪への旅路について惨死し、漂泊の五四新文学者という自画像を完結したのであった。

原文、訳文対照表

| | |
|---|---|
| 郁達夫的小品文，是充分表現了一個富有才情的智識分子，在亂動的社會裡的苦悶心懷。即使是記遊文罷……我感到他的憤悶也是透露在字裡行間的。他說出遊並非「寫憂」，而「憂」實際上是存在的。 | 達夫の小品文は、才能のある知識人が動乱の社会での苦悶の気持ちを十分に表している。たとえ紀行文も……彼の怒りと煩悶は字面に溢れていると思う。彼の旅行は「憂を書いている」わけではないと言っているが、「憂」は実際に存在している。 |
| 猶太人的漂泊，聽說是上帝制定的懲罰。中歐一帶的「寄泊棲」的遊行，彷彿是這一種印度支尼族浪漫的天性。大約是這兩種意味都完備在我身上的緣故罷，在一處沉滯得久了，只想把包裹雨傘背起，到絕無人跡的地方去吐一口鬱氣。（感傷的行旅） | ユダヤ人の漂泊は、神の制定した懲罰だそうである。中欧一帯の「ジプシー」の漫遊は、あたかもこのインド民族の一派ロマニの天性のようである。おおかたこの二種類の情緒がわが身に備わっているせいであろう、一カ所に長く滞ってしまうと、荷物と傘を背負い、人影の全く無いところへ行って、憂さをはらすことばかりを考えてしまう。 |
| 我今後的黑暗的前程，也想起來了。我的先輩回國之後，受了故國社會的虐待，投海自盡的一段哀史，也想起來了。<br>我在那無情的島國上，受了十幾年的苦，若回到故國之後，仍不得不受社會的虐待，教 | 僕の今後の暗い未来も、思い出した。僕の先輩が帰国して故国社会の虐待を受けたため、海に入って自殺した哀史も、思い出した。<br>僕はあの薄情な島国で、十何年も苦しんでおり、もし母国に帰っても、また社会に虐待されねばならぬとしたら、僕は |

| | |
|---|---|
| 我如何是好呢！ 日本的少女輕侮我，欺騙我時，我還可以說『我是為人在客』，若故國的少女，也同日本婦人一樣的欺辱我的時候，我更有什麼話說呢！ 你看那euraasia不是已在那裡輕侮我了麼？ 她不是已經不承認我的存在了嗎？ 唉，唉，唉，唉，我錯了，我錯了。我是不該回國來的。一樣的被人虐待，與其受故國同胞的欺辱，倒還不如受他國人的欺辱更好自家寬慰些。 | どうしたらいい！ 日本の少女が私を軽蔑したり、騙したりする時、まだ『僕は異郷にいるのだから』と言えるが、もし母国の少女も日本人の女性と同じように私を軽蔑するならば、何と言ったら良いのか。あのeuraasia（高註：欧亜混血人のこと）はもうあそこで私を虐待をしているではないか？ 彼女はもう私の存在を否定しているではないか？ ああ、ああ、ああ、ああ、僕は間違ってる、僕は間違ってる。僕は帰国すべきじゃないんだ。同じように虐待されるならば、母国の同胞に虐められるより、他国の人間に軽蔑された方が、まだ自分を宥められる。 |
| 一天到晚，在頭等電車上，面上裝了好像很忙的樣子，實際上卻一點事情也沒有，他盡伏在電車頭上的玻璃窗裡隨電車跑來跑去的跑，在那裡看如流水似的往後退去的兩旁的街市；有時候看街市看得厭煩了，他就把目光轉到同座的西洋女子或中國女子的腰上，肩上，胸部，後部，腳肚，腳尖上去。<br>後來他坐了幾天人力車，有幾次無緣無故的跑上火車站上去，好像是去送人的樣子。 | 一日中、一等電車に乗って、忙しそうな顔をして見せたが、実はすることはなにもない。彼はただ電車のガラス窓にもたれて、電車が走り回るのに任せて走り、そこで流れる水のように後ろへ消え去る両側の街並みを眺め、時に町を見るのに飽きると、彼は同席の西洋人女性や中国人女性の腰、肩、胸、お尻、脹ら脛、つま先に目を向ける。<br>後には彼は幾日か人力車に乗り、何度か分けも無く駅に行っては、見送りをするふりをした。時には夜中に人力車を雇って黄浦灘の郵船各社の埠頭に行き、明かりの煌めく、旅人の喧騒の中、これから |

| | |
|---|---|
| 有時在半夜裡他每雇了人力車跑上黃浦灘的各輪船公司的碼頭上，走上燈火輝煌，旅人嘈雜的將離岸的船上去。又過了幾天他的過敏的神經，怕人力車夫也認得他了，所以他索性不坐車子，慢慢的步行起來。他在心裡，替他自己的行動取了幾個好名稱，前者叫做走馬看花，後者叫做徒步旅行。徒步旅行，以旅行的地段作標準時，可分作市內旅行，郊外旅行的兩種。以旅行時的狀態作標準時，可分作無事忙行，吃食旅行的兩種。 | 出港する船に乗ったこともある。また幾日かが過ぎると、彼の過敏な神経は、人力車夫にも自分のことを覚えられてしまうのではないかと恐れ、いっそ人力車に乗ることをやめ、ゆっくりと歩き始めた。心の中で、彼は自分の行動にいくつかの良い名前を付け、前者を「走馬看花」と名付け、後者を「徒歩旅行」と名付けた。徒歩旅行は、旅行の場所を基準にすると、市内旅行と郊外旅行の二種類に分けられる。旅行するときの状態を基準にすると、「無事忙行」（用事もないのに忙しい旅）と「吃食旅行（食事の旅）」の二種類に分けられる。 |
| 前數日，杭江鐵路車務主任曾蔭千氏，介友人來談；意欲邀我去浙東遍遊一次，將耳聞目見的景物，詳告中外之來浙旅行者，並且通至玉山之路軌，已完全接就，將於十二月底通車，同時路局刊行旅行指掌之類的書時，亦可將遊記收入，以資救濟 Baedeker 式的旅行指掌南乾燥。 | 数日前、杭江鉄路主任曾蔭千氏が、友達を介して相談してきた。私に、一度浙東を遊歴し、耳で聞き目で見た風物を、浙州を訪れる国内外の旅行客に詳しく伝えて欲しい、また、玉山行きのレールは、すでに完全に繋がり、十二月の末に開通する予定である。それと同時に鉄道局が旅行指掌の類の本を刊行する際には、旅行記も収め、もってベーデカー式旅行ガイドブックの無味乾燥さの救済とすることも出来ようという。 |
| 近年來，四海昇平，交通大便，像我這樣的……也居然成了一個做做游記的專家。（「屐 | 近年来、四海は安定し、交通は便利になり私で……すら紀行文の専門家になった。 |

| | |
|---|---|
| 痕處處・自序」) | |
| 旅行雜誌發行訖今，已及兩年。每季出版一次，讀者每病其時日過長。近獲各地來函，屬為改作月刊者，實繁有徒……自來年一月起，每月發行一冊。 | 旅行雑誌の発行はこれでもう二年になった。毎季一号の出版では、間隔が長すぎると読者は皆苦情を述べている。最近各地から手紙が寄せられ、月刊にして欲しいという声が多い。……来年一月から、毎月一冊発行する。 |
| 故派遣攝影隊出發全國實地攝影照片……凡足以代表彰顯我國者，兼收並取。 | 撮影隊を全国に派遣して現地で写真を撮らせる……我が国をアピールするすべてのものを収める |
| 二三十年代，旅遊被認為能激發人的愛國熱情、陶冶情操、鍛鍊體魄、認識社會和各地風情民俗，豐富知識，而受到社會團體和傳媒的提倡 | 二三十年代、旅行は人々の愛国心を掻き立て、感情を陶冶し、体と魂を鍛え、社会と各地の風俗を認識させ、知識をも豊富にさせるものとして認められた。 |
| 中國各地生起的西北旅行和遊記的熱潮…不得不從意識形態的角度更加以分析。<br>一九三一年的九一八事變，中國面臨失去東北的民族危機 | 中国内地都会で生じた西北旅行と旅行記のブームは……イデオロギーの角度から、もっと分析されなければならない<br>一九三一年の満州事変（九一八事件）で中国は東北を失った民族的危機に直面し |
| 知河山之歧異，而後能定岐軌之趨正。 | 山河の相違を知った後で、異なる軌道を同一に定めることが出来る |
| 使美麗山河印像映入全國人民腦際足以增加及堅強其愛國心。 | 美しい山河のイメージを全国人民の脳裏に映じ入れ、その愛国心を大に増加させ強化させる |
| 「中國的老百姓真可愛呀！」是語堂的感嘆。<br>「春秋兩季是香市，是她們的 | 「中国の庶民は本当に可愛いね」これは語堂の感嘆。<br>「春秋両季節は香りの市場だ。彼女た |

| | |
|---|---|
| 唯一的娛樂。也可以借此去遊山玩水，也可以借此去散發性欲，Pilgrimage 之為用，真大矣者。」是精神分析學者潘光旦的解釋。<br>(「西遊日錄」) | ちの唯一つの娯楽で、それに乗じて山で遊んだり水で遊んだり出来るし、それに乗じて性欲を発散することも出来る。Pilgrimage の効用は、本当に大きいね！」これは精神分析学者潘光旦の解釈である。 |
| 「像這一種生活過慣之後，不知會不會更想到都市中去吸灰塵，看電影的？」<br>語堂感嘆無量地在自言自語，這當然又是他的 Dichtung 在作怪。前此，語堂和增嘏　光旦他們，曾去富春江一帶旅行；在路上，遇有不適意事，語堂就說「這是 Wahrheit ！」意思就是在說「現實和理想的不能相符」，係借用了歌德的書名，而付以新解釋的；所以我們這一次西遊，無論遇見什麼可愛可恨之事，都只以 Wahrheit 和 Dichtung 兩字了之。」「出昱嶺關記」 | このような生活に慣れたら、また都市に行って埃を吸ったり、映画を見たりしたくなるのだろうか。」<br>語堂が感慨無量に独りごちているのは、もちろん彼の Dichtung がまたも災いしているのだ。これより前に、語堂と増嘏、光旦らは、かつて富春江一帯を旅行し、道中、意にそぐわないことがあると、語堂は言った。「これは Wahrheit!」つまり「現実と理想の一致不能」を言っているのであり、ゲーテの書名を借りて、新しい解釈を付与したものである。従って、僕らの今度の西遊では、どんな愛すべき憎むべきことに出会おうと、全て Wahrheit と Dichtung という二つの言葉で片付けられてしまう。 |
| 夢想著揚州的兩字，在聲調上，在歷史的意義上，應是如何的艷麗，如何地**夠**使人魂銷而魄蕩。 | 揚州の二文字を夢見ていると、響きにおいても、歴史的意義においても、如何に艶麗で、如何に人の心をうっとりさせることだろうか |
| 「遲桂花」、「過去」、「在寒風裡」的三篇…大約因平時愛讀 | 「遅桂花」、「過去」、「在寒風裏」の三作は……恐らく常にドイツの小説を愛読 |

| | |
|---|---|
| 德國小說，是於無意之中受了德國人的 Ezrahlugen 的麻醉後的作品。 | するため、無意識の中で、ドイツ人の Erzahlungen（物語、高註）の麻酔を受けた後の作品であろう。 |
| 這一次旅行的煞尾，倒很有點像德國浪漫詩人的小說。 | 「今度の旅行のおしまいは、意外にもドイツロマン派詩人の小説に少し似ていた |
| 看過去也像是畫上的行人，要令人想起小時候見過的鍾馗送妹圖或長江行旅圖來。 | 見るほどに画中の通行人のようで、小さい頃に見た鍾馗送妹図或いは長江行旅図を思い出させる。 |
| 我們中國的許多人，-- 我在此特別鄭重聲明：并不包括四万万同胞全部！ -- 大抵患有一种“十景病”，至少是“八景病” | われわれ中国人の多くのものは、――かならずしも四億の同胞全部を含むものでない、その旨、特に謹んで声明しておく！ ――たいてい、「十景病」か、少なくとも「八景病」に、かかっている。 |
| 光旦，你去修馮小青的墓罷，我立意要去修李香君的墳，這琴操的墓，只好讓你們來修了 | 光旦、君は馮小青の墓を手入れしなさい、私は李香君の墓を手入れすることを決意した。この琴操の墓は、君たちに任せよう |
| 幽默不是中國國產的，中國人不是長於幽默的民族。 | ユーモアは中国産ではなく、中国人はユーモアに長けた国民ではない。 |
| 自己不是革命家，只能寫這樣的東西。 | 自分は革命家ではないので、こういうことしか書けないのだ。 |
| （晚上讀時流雜誌之類，頗感到沒落的悲哀） | 夜に時流の雑誌を読んで、頗る没落の悲哀を感じた。…… |
| 做些實際的事情，當然要比弄弄紙筆，說說空話有趣得多；「予豈好辯哉，予不得已也」，說起來倒有點像孔孟之徒了，但被天強派作了閒人之後，他 | 実際的なことをするのは、紙と筆を弄び、空しい話をするよりずっと面白い。「余あに好んで弁ぜんや。余は已むを得ざるなり。」言葉にしてみると些か孔孟の徒のようであるが天に無理やり閑人に |

| | |
|---|---|
| 的寂寞與淒涼，也並不是可以借了一句兩句的話來說出的。 | させられた後では、彼の寂寞と寂しさとは、一言二言の言葉によって語れるものではないのである。 |
| 大約描寫田園野景和閒適的自然生活，以純粹的情感之類，當以這一種文體為最美而最合 | およそ田園風景と悠々自適な自然生活、及び純粋な情感を描写するには、このような文体（小品文、筆者注）をもって最も美しく最も合致しているとみなすべきである。 |
| 由這大自然的迷戀，必然地會發生出一種向空遠的渴望（這就是德國人的所謂 Sehnen-sucht nach der Ferne），從這向空遠的渴望中，又必然地會醞釀出一種遠遊之情（這就是德國人的所謂 Wanderlust）來。 | 自然の愛好から必然的に遠くへの憧れが生じる（これはドイツ人のいわゆる Sehnen-sucht nach der Ferne）この遠くへの憧れから、また必然的に遠方への旅に行く感情が醸されるのだ（これはドイツ人のいわゆる Wanderlust）。 |
| 至於近來的耽溺風雅，提倡性靈，亦是時勢使然，或可視為消極的反抗，有意的孤行。周作人常喜引外國人所說的隱士與叛逆者混處在一道的話，來做解嘲；這話在周作人身上原用得著，在林語堂身上，尤其是用得著。（新文學大系散文選集導言 | 近来風雅に浸り、性霊を提唱するのも、また時勢のためであり、消極的な反抗と有意的な独りよがりだと見なしてもいい。周作人は好んでよく（自分が）外国人の言ったように隠士と反逆者の融合という言葉を引用して自嘲するが、この言葉はに周作人に用いたが、林語堂にも使える。 |